

開催地名：岐阜県輪之内町	
開催日時	令和2年10月18日（日） 9：00 ～ 11：00
開催場所	輪之内町文化会館
語り部	菅原 康雄 （宮城県仙台市）
参加者	輪之内町区長会、輪之内町防災士連絡協議会 約50名
開催経緯	当町では、近年大きな災害が発生していないため、住民の災害への危機意識が薄れつつあるとともに、自主防災組織の防災意識に温度差があることが問題視されている。今回、東日本大震災の語り部より、特に避難所における自主防災組織での活動についてと、大規模災害被災をうけての自主防災組織による防災訓練の実施とその内容についてのお話を伺い、今後の活動に役立てていきたい。
内容	（１）平時より取り組んでいること、心がけていること 我々は、自分たちの町から一人の犠牲者も出さないこと、なおかつできるだけ行政には頼らないということを念頭に置いて活動している。すなわち、自分の身は自身で守るというスタンスが基本である。具体的には、実際の被害を想定した「訓練」と、地域での「協力体制の整備」の2本柱で取り組んでいる。特に「協力体制の整備」については、日頃の挨拶にはじまり、顔見知りになっていくことから始めている。そうすることによって、色々な町内会が相互に協力してくれるようになってきたと言える。そして、続いて紹介したいのが「名簿作り」である。この名簿こそが我々福住町の徹底した防災対策の根幹をなすものとなっている。名簿の中に落とし込むのは住所、氏名、電話番号、勤務先、緊急連絡先、動物（ペット）の有無といった項目で、これを毎年1度行う防災訓練の前に更新している。もちろん、町内の全員が賛同してくれる訳ではないので、「個人情報保護法」を遵守しつつ作成をしている。それでも町内の約8割は賛同してくれるので、大災害時の安否確認の時には非常に役立った。従って、「プライバシーの侵害」のデメリットに目を向けるよりも、多くの賛同者を含んだ名簿の作成というのは非常に重要であり、有益なことだと考える。名簿は悪用される心配もあるかもしれないが、幸いなことに、これまで悪用されたという事実はただの1度もない。そして、我々が「重要支援者」と呼ぶ要介護の高齢者の名簿は、地図を入れた上での対応方式となっているので、災害が起こった時にはその地図を用いて安否の確認をすることができる。もちろん、非賛同者に関しては名前だけを聞いておき、賛同者とは別のリストを作っておく。賛同者のみの名簿だけでは犠牲者ゼロは達成できないということを、我々は認識している。 もう一つの柱である「訓練」については、お祭りの中に組み込む等の工夫をして、参加しやすい環境を作る必要がある。通常の「防災訓練」だと一般の方々の参加はあまり見込めない。そうすると、行政職員や消防関係者の方々だけの緊張感のない形式的な「防災訓練」となってしまう、あまり効果を見込めないものと

	なる。「防災訓練」を地域のお祭りやイベントなどと一緒に実施することによって、お年寄りから幼児まで幅広い層の参加者が見込め、ひいては、地域全体で「協力体制」を取れるようなシステム作りにつながって行くようになる。(先程挙げた「名簿作り」への協力体制が築きやすくなるという一面も合わせ持つ) (2) 発災時に実感したこと 発災後は、規模が大きければ避難所へと駆け込むことになるが、その中で、皆さんは真っ先に当面の食べ物、飲み物の心配ををすると思う。しかし、最重要課題となるのはトイレの問題だ。トイレの問題は、阪神淡路大震災でも取り上げられた。命からがら逃げ込んできたのに、地震の直接の原因以外で亡くなってしまう要因の一つに、「トイレへ行かない」という事が報告されていた。従って、緊急事態の時でも、いかにしてトイレを利用しやすい状態で準備・設営するかを真剣に考えなくてはならない。 また、避難所では、在宅避難者にはおにぎりなどを配布できなかった。30 分かけて高齢者が自宅から歩いて来ても、食料を提供できなかったのだ。在宅避難者も同じように被災している。しかし自宅にいるというだけで救援物資が分けられない。こうした点は今後検討していく必要がある。 (3) 今後の課題と心構え 今回は町独自で継続してきた防災の取組が非常に有効に機能した。メディアからは「福住町方式」と呼ばれ、さまざまな媒体で取組が紹介された。防災に関して福住町では「隗より始めよ」ということを大切にしている。これは思い立ったが吉日、という意味である。予算がない、人手がないと思うのではなく、何とか工夫をして準備に着手する。物がなければ皆で持ち寄って工夫すれば良い。災害はいつ発生するか分からない。こうした心構えで今後も防災に取り組んでいきたい。
開催地より	東日本大震災の被災経験をふまえた本日のお話は、非常にわかりやすく聞くことができた。日頃から真摯に取り組まれてきた姿勢に敬意を表するとともに、その重要性に強い共感を覚えた。今後の活動に大きなヒントとなった。